

楽譜とコンサートの間で

2019. 10. 16

ことば以前の秩序ー造形的思考の試みー

三善晃 混声合唱とギターのための組曲『クレーの絵本 第1集』

三善晃 混声合唱組曲『クレーの絵本 第2集』より



Ensemble Musicus&Ensemble Clair,Kyotoの合同演奏として取り上げたのは、「クレーの絵本」 混声合唱とギターのための組曲「クレーの絵本」(1978)、混声合唱組曲「クレーの絵本 第2集」(1979)。

谷川俊太郎の詩集〈ポール・クレーの絵による「絵本」のために〉をテキストとして、三善晃が作曲をした。「第2集」は男声合唱のために書かれたものを1981年に三善晃自身が混声合唱のために書き換えている。難曲として知られ、なかなか実演に触れることが無いと言われる「クレーの絵本 第2集」。今回は3曲を抜粋して演奏する。

三善晃はパリ音楽院で作曲を学び、帰国後、多くの合唱作品も残した20世紀後半を代表する世界的な存在。フランス近代和声を踏まえたアカデミックで抒情性をたたえた初期の作風は、1970年の「王孫不帰」の頃から、日本的なものへと変化を見せ、「生きることは」という死生観がにじみ出た作品が多く見られようになる。

「クレーの絵本」もこの三善の死生観が色濃く出ている。「黄色い鳥のいる風景」などは「生」をおおらかに歌うのだが、もちろん、「生」と「死」は背中合わせであり、「どんなよろこびの深い海にも 一粒の涙がとけていないということはない」(黄金の魚)のである。

以下に、三善晃自身の言葉を引用する

「谷川さんのこの詩集は、詩の享受者としての私を惹きつけるばかりでなく、私の中に音の種子を蒔き、育ててくれた。」

「クレーの風景と谷川さんの眼が、私に遠近法を許してくれる、と、第1集でも述べたが、それは今回も同じである。それは今回さらに深く感じられて音構造の陰影につながったように思う。」

「地表の背律や不合理、生の哀しみや痛みが、その遠近法を彩色するのだが、その色彩に透視されるものは虚無や絶望でなく、地表への希いと生への愛であり、そこに、詩が私を捉え、私が音を書きたかった理由がある。」

1980. 6. 5 三善晃 (カワイ出版楽譜より)

2019. 10. 16

キリストのまねび ー物語としての聖書ー

10月19日(土)Ensemble Musicus & Ensemble Clair,Kyoto ジョイントコンサート

でClairが演奏する曲について、少し詳しく背景なども含めて書いてみたいと思います。

◇A 150. Genfi zsoltar 詩篇150番（コダーイ）

10.2 の記述の通り

◇St.Nepomuks Vorabend (Kinderlied) 聖ネポムクの前夜祭（ラインヴェルガー）

この曲はリヒテンシュタイン公国出身のラインベルガーがゲーテの詩に作曲した作品。ラインベルガーは19世紀後半にドイツで活躍した作曲家であり、指揮者オルガニスト、この曲は北ヨーロッパで主に橋の守神として信仰を集める聖ネポムクの前夜祭の風景をゲーテが書いたものである。ネポムクは国王の怒りを買って殉教し、川にその身を投げ捨てらるとされる。ネポムクは聖職者として秘密を守ったのである。だからこそ、橋の守神となっているのだ。

ネポムクの殉教を偲んで前夜祭には人々が紙の船にろうそくをたてて川に流す。この幻想的な風景を星から星へと伝えよと歌うのである。シンプルで色彩的、印象的な曲である。

◇The virgin martyrs おとめ殉教者たち（バーバー）

ワッデルの英訳詞にアメリカ現代の作曲家S.Barberによる作品。Barberは20世紀中盤に活躍した。特に「弦楽のためのアダージョ」が有名。この曲は「2つの合唱のための歌」の第1曲。おとめたちは花束にする花々を摘みながら青々とした野を群れをなして歩いてゆく。赤いバラをイエスの耐え忍ばれた苦しみのために、ゆりとすみれを愛のために摘みながら。バーバーがこれほど多くの合唱曲を残したとは知らず、彼の合唱曲全集を眺めている。戦後の実験的であったりアバンギャルドな作曲の流れには距離をおいたバーバーはロマン主義的音楽といえるだろう。この曲も美しいメロディをもとに目まぐるしく転調を繰り返し、調性にはっきりとした意味をもたせる。純粹無垢な信仰が、えもいえぬ官能的な響きを醸し出している。

◇0 vos omnes おお、すべての人よ（コチャール）

ハンガリーの作曲家Kocsarによる作品。Kocsarは今年の8月に惜しまれて亡くなった現代ハンガリーを代表する作曲家で多くの合唱作品も残した。この作品は、キリストが十字架にかけられたことを記念する受難週に歌われるもので、哀歌の一部を借用したもの。預言者エレミヤが、これからエルサレムの民に下ろうとしている、神の怒りを、私はすでに感じていると、道行く人々に訴えている場面である。Kocsarは十字架にかけられた瀕死のキリストの言葉として作曲している。劇的なフォルテで始まりピアノで解決される。

◇Super flumina babilonis バビロンの川のほとりで（コチャール）

0 vos omnesと同じくハンガリーの作曲家Kocsarによる作品。Kocsarは多くの合唱のための作品も残したが、その名声が広まるにつれて、世界中から作曲の依頼を受けることが多くなった。多く場合、マジヤール語ではなくてということが条件だったようで、Kocsarは歌うものにとって共通語と言ってよいラテン語で多くの作品を書いたと述べている。このSuper flumina babilonisはバビロンの捕囚について書かれた詩篇をテキストとしている。0 vos omnesでの預言者エレミアの言葉どお

り、イスラエルの民はバビロンに征服され、囚われ人となる。バビロンの川のほとりで慰めのために神のための歌を歌えと言われた囚われ人たちは柳の木の枝のなかほどに伴奏として使う楽器をかけて拒否をする。そして、神のために歌う歌をどうして歌えようかと神殿のあるシオンの丘を思い浮かべて泣き嘆くのです。

なお、このKocsar作曲Super flumina babilonisは、ベラバルトク国際合唱コンクールの求めに応じて書かれたが、日本における演奏記録がなく、今回の演奏がおそらく日本初演となる。

◇谷川の水を求めて（高田三郎）

高田三郎の作品にはどれも祈りにあふれている。

代表的な合唱曲「水のいのち」「心の四季」… 個人的にはもともと歌曲である「くちなし」などもとても祈りに満ちていて好きなのだが…。

この「谷川の水を求めて」は詩篇の中にあるバビロンの捕囚のエピソードをテキストとしたもので、ルネサンスの大作曲家パレストリーナやラッソも作曲している。高田三郎のこの作品はカトリック教会の典礼聖歌として歌うために作曲されたものである。それまで教会で歌う典礼音楽は必ずラテン語でなければならなかったが、各国の言葉でのみさが許されて、日本では主に高田三郎がこの典礼音楽の作曲を担ったのである。今、日常的に日本のカトリック教会では当たり前前に典礼で歌われているのである。とにかく高田作品には祈りがある、真理がある。そして、音の運びの前とにかく言葉がある。

実はClairには、敬虔なカトリック教徒がいる この曲を初めてClairで演奏した際に感涙の涙を流した。日常的に歌われているこの曲がこんなに祈りに溢れた曲だったとはと…。

ブルックナーの言葉を思い出す。「ミサ曲は教会におけるシンフォニーであり、コンサートホールにおけるシンフォニーはミサ曲である」

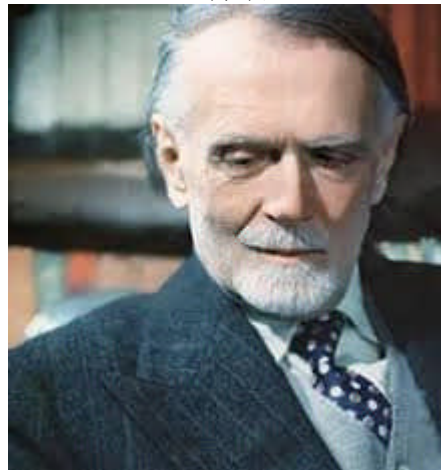
預言者エレミアのO vos omnes、そして、そのとおりバビロン捕囚となり神を思っ泣くSuper flumina babilonis、そして、谷川の水を慕ってあえぎさまよう鹿のように、日夜神を慕っていると嘆き歌う「谷川の水をしたい」を並べることで、歴史的な事実を踏まえた大いなる物語を時代の古今、東西の作曲家の作品でえがいている。

2019. 10. 2

コダーイの詩篇150番について

『詩篇』は、旧約聖書に収められた150篇の神への賛美の詩で、150番はもちろんその最後を飾ります。この作品にはハンガリーの民族楽器であるツィンバロンやツィテラが入っているのが特徴です。コダーイは1つ年下のバルトクに手ほどきをして、当時まだではじめたばかりの蓄音機を担いでハンガリーの村々をまわり、そこに伝わる踊りの音楽や民謡を録音・採譜し、それを作品として発表します。20世紀の前半の世界的な音楽の流れを作った「民族主義音楽」の始まりでした。コダー

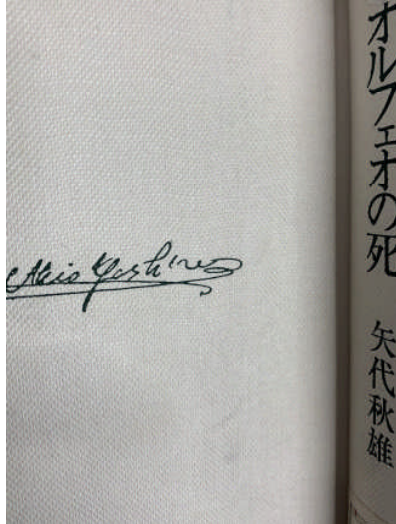
イもバルトークもハンガリーの民族音楽なしには全く語れません。



コダーイの合唱曲に「いつも遅れるもの」という作品があります。誰のことかというハンガリーの人たちを指します。ヨーロッパではヨーロッパ族ではないという扱いを受け、どこかおれたちはあかんのかなという意識があると聞きました。そして、「孔雀」。この曲はバリエーションとして管弦楽曲としても書かれていて、コダーイの作曲技術が詰まっていると評価される名曲ですが、このテーマとなっている「孔雀」は民謡を基としたものです。オスマントルコにヨーロッパ全域が震え上がり、モーツアルトやシューベルト、ベートーベンなどもトルコ行進曲やバイオリン協奏曲「トルコ風」、軍隊行進曲を書きました。あれはオスマントルコの軍楽隊なんですね。ズンチャカチャッチャ、ズンチャカチャッチャと行進するオスマントルコはとんでもなく強かった。ハンガリーもオスマントルコの侵攻にさらされます。囚われの身となるハンガリーの人たちを孔雀が飛んできて救ってくれるという民話に基づいた歌なんです。ハンガリーオーストリア帝国も実質はハンガリーはオーストリアに征服されていたとも言えます。第二次世界大戦ではナチスドイツにはやくに併合されてしまいました。そして、そのあとは汎スラブ族でもないのに社会主義国の東ヨーロッパに属することを余儀なくされました。いつも自分たちの望まない事に巻き込まれて生き抜いてきたハンガリーの悲しみや、それだからこそ誇りを持って生きろとコダーイはこれらの曲を書いたと思えて仕方がないのです。第二次世界大戦中も社会主義体制でもハンガリーに残ったコダーイを、権力の側にいたのではないかという人がいることも確かですが、ボクはそうは思えないのです。ナチスを嫌ってアメリカへ行ったバルトークは自由を求め、民衆の側にいたと評価されますが、そのバルトークはアメリカに移った後もコダーイを悪くいう人には必ず激しく反論し、コダーイの音楽を聴けばわかる わからない人は音楽をする資格などない！といったと伝わっています。旧約聖書の詩篇をテキストとしたこの曲ですが、コダーイのこの曲に描いたものはやはり民族主義音楽としてのハンガリーに対する深い愛そのものなのです。

2019. 9. 10

矢代秋雄さんについて



矢代秋雄のピアノ協奏曲に心を奪われた 山田和樹
指揮NHK交響楽団 ピアノ河村尚子の演奏でだ この曲、
初演は中村紘子のピアノで、その録音も聴いてみた 作
品の持つ力はもちろんなのだが、ゴツゴツしていて、
主張がグリーンと迫ってくる感じだった 山田和樹や河村
のピアノはそんな時代をふたつ越えて、スタイリッシ
ュに、より洗練された音楽としてこの矢代秋雄作品を
歌うのだ 一見（一聴か）難解に思えるこの曲もしっか
りと設計されたスタイルの中で普遍的な音楽としてボ
クの心に届く

矢代秋雄という名前はもちろん知っていた 実際に初
めて接したのは名張青峰高等学校の校歌だ いや名張桔梗丘高等学校の校歌だった
かもしれない 名張にある県立高等学校のうちの2つが統合して新たに名張青峰高
校が誕生する記念式典に出席した時だった 校歌は名張桔梗丘高等学校の校歌のメ
ロディに新たな詩をのせたものだった その作曲が矢代秋雄だった えらく構成的で
本格的な校歌やなあと思いながら、わたされた楽譜に目をやりながらいつもの癖で
早速音を頭の中で鳴らしていた 中間部の展開部の後半に出てくるAs（ラ b）は、A
（ナチュラル）にした方が格調高くはないか？などと思いながら、生徒によるブラ
スと歌を聴いたが、なんのなんのやはり楽譜通りが合理的であった のちに知るこ
とになるのだが、矢代秋雄は40代後半にこじらせた風邪が原因で心不全のためにな
くなっている その最晩年に三重国体の音楽監督を務めて、式典音楽やファンファ
ーレなどを書き、名張桔梗丘高等学校の校歌も書いていたのだ

八代亜紀は知ってるけど、矢代秋雄ってだれ？ってなもんで彼の存在はもう忘れ
られようとしているのかもしれないが、決してそのような才能ではないと思う 彼
の師である池内友次郎をして「日本にとっての初めての作曲家」と言わしめた存在
である そして、はやくから三善晃の才能を見抜き、「天才の出現」といったその
人である 矢代秋雄の著作集を図書館で借りてきて読んでみたが、時には軽妙に、
そして、正当に音楽の本質に切り込む文章は彼の作品とそっくりである 残念なこ
とに彼は声楽作品や合唱曲を残さなかった ブラームスの子守唄の編曲作品がある
と教えてもらったが、残していたならば是非やってみたかったと思うのだ

今年は矢代秋雄生誕90年である

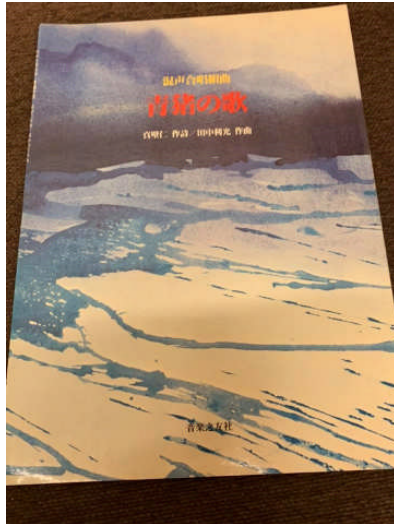
2019. 6. 18

「みちのく」に寄せて

合唱団Rinteは、7月28日14:00からなら100年会館中ホールでおこなわれる第12回
定期演奏会で、「昭和の合唱名曲集」と称したステージでこの「みちのく」を歌う

このみちのくは田中利光作曲混声合唱組曲「青猪（あおじし）の歌」の終曲であ
る 昭和56年度全日本合唱連盟課題曲にもなった曲である 気骨ある曲だ

作曲家自身が、楽譜の冒頭にこの曲について、次のような文を寄せている



真壁仁氏の“青猪の歌”は彼の代表的な傑作である。重厚でしかもみずみずしい情感を湛えたこの美しい詩に触発されて、厳冬の酷寒に耐えながらよるべなく雪原を辿る青猪を実感として捉えながら作曲した。

雪深い岩山に棲息し、姿をみせてもとらえることの出来ない幻の獣、その大きな図体は剛い銀毛で覆われ、積雪が時に青い光を帯びるように夕暮や月夜に青く輝くという青猪。不器用で、内気で、絶滅の一途を辿る他ない青猪の孤独。環境に対する不適応性とその叡智の乏しさを、幾多の歓喜と悲哀の記憶と共に確認しながらひとり黙々と歩む青猪の中に、私は自己の投影を見出したのである。彼の図体と醜貌からはその内面は推測出来ない。これらの不条理なものに対する青猪の怒りがやがて諦めと悲しみにかかわるとき、青猪の救いとしてあるものは“些やかな期待”だけである。「雪はみちのくやまをとざし ひめられた春こそ大きかった」という詩の週末に私は真壁氏の人間愛のすべてを了解した。

渋い曲である。そしてわりあい気に入っている作品の一つである。テンポ アゴーギクの中にある情熱のすべてを感得していただきたいものである。

なおこの曲はNHK仙台中央放送局の委嘱により作曲したもので、岡崎光治氏の指揮、仙台放送合唱団によって深い理解と熱意のもとに感動的に録音されたもので、昭和45年度芸術最優秀賞を受賞した。

渋い文である。そして、限りなく深い共感と情熱によって作られた曲なのだということが溢れでている。田中利光氏は青森の生まれ、真壁仁は山形の生まれだ。雪が降るとうれしくて走り回っていた太平洋側の生まれのものにはおよそ想像もつかないのだろう。

スケールの大きく、とんでもなくかっこよく、深いところで心をわしづかみにするこの曲にどこまで共感し、迫れるのか。密かに期待している。

2019. 5. 30

【知の巨人、知の作曲家 柴田南雄】

改めて柴田南雄である。

20世紀後半の日本を代表する作曲家だ。武満徹、三善晃、湯浅譲二、石井真木、黛俊郎らのあまりにも光り輝く存在に隠れている嫌いはあるものの、忘れてはならない存在だ。いや、今後、再評価の高まる作曲家でもあると思っている。

昨年に引き続いて、柴田南雄の合唱作品を取り上げた。「歌垣」から終曲の「結びのうた」である。昨年は、「三重五章」より「万葉集の三つの歌」だった。そして、その前は女声合唱曲「冬の歌」の第1曲「氷雨」と終曲「冬の最後の日暮れに」だ。柴田南雄は晩年、合唱作品にその心血を注いだ。しかも、合唱におけるシアタ

一ピース作品を多数残した。「追分節考」「宇宙について」「自然について」「みなまた」「歌垣」「布留由良由良」「三重五章」……。まだまだある。言葉を伴う「音の空間」「音の場」というものを追求したともいえる。「追分節考」などは、会場を旅人（ペアの男声）が追分を歌いながら動いていく。舞台では、女声がまるで景色を醸し出すような音の風景をヴォカリーゼで描く。まさに、追分の風景を見ているかのサウンドスケープである。そこに、追分節について著述した「追分節考」などをかぶせて、追分節についての価値を民俗学的、文学的な側面からも入れている。まさに、「知の作曲家」である。

柴田南雄の合唱作品は譜面づらはそう難しくない。ところが実際に譜読みしてみるととても難しい。生理的に音を取りにくいといったところだろうか。指揮者の田中信昭さんが常々柴田南雄の音楽を指して「日本のバッハだよ」とおっしゃっていた。非常に分析的であり、幾何学的であるのだろう。「冬の歌」をやった時も、あるパートやいくつかのパートだけでやっても何なのかわけが分からないと取り組みはじめた当初は嘆きにも似た声を聞いたが、全体が見えたときに、その音楽が描く姿にえもいえぬ魅力を感じていたように思う。実際に、もう一度ぜひやってみようという声は多い。

今回やっている「歌垣」はこんな曲だ。歌垣とは、近世はじめの頃までおこなわれていた男女の愛の形。ハレの日に呼び合い、歌を歌い合って出会う愛の形である。今は「夜這い」と書いて、なんとも淫乱な印象があるが、本来は「呼び合う」→「よぼう」なのである。なんともファンタジックではないか。和歌による愛の形や、世界の様々な愛について、男女が歌い合いながら曲は進んでいく。そして、「結びのうた」で愛とは何なのかをもう一度問いかけて曲は閉じるのだ。

柴田南雄は学者一家の出身で、彼自身も東京帝国大学理学部植物学科卒業、同大学院中退。文学部美学美術史学科卒業。ところが、作曲活動をおこない、音楽評論などもおこなってきた。NHK交響楽団の演奏会の解説をテレビでよくされていたし、桐朋学園大学、放送大学の教授もされていた。語り口も柔らかく、非常にわかりやすかったことを記憶している。ところが、語り口とは違い、彼の選ぶテキストも、曲の構成も、そして、作品も高度なのだ。

「結びのうた」は、アルトのパートソロから始まり、各パートがそれぞれ違う言葉を歌いながら呼び合うように進む。ポリフォニックである。そして、ポリフォニックな音楽がクライマックスを迎えると、男女に分かれて呼び合って歌う。ロマンチックである。そして、大団円を迎えるというわけである。この曲のおさらいをしているかのようでもあり、「愛」というテーマを扱いながら、クラシック音楽の有り様を歴史的にもなぞっているようでもある。

このような有り様は、柴田南雄の大作「交響曲ゆく河の流れは絶えずして」にも見てとれる。クラシック音楽の歴史をなぞるように交響曲は進んでいく。バッハ、モーツァルト、ベートーベン、そして、マーラー。明らかにこれら大作曲家の手法を使って曲はかかれ、最終楽章を迎える。ここで柴田南雄は合唱を入れて「ゆく河の流れは絶えずして」という方丈記の一節を引用して音楽を締めくくる。この交響曲と「歌垣」の「結びのうた」が重なって仕方がない。なぜ、柴田南雄は交響曲の

最後に合唱を入れたのか。それは明らかに音楽が持つ知的側面だけではなく、もう一方にある言葉や文字による知的側面を入れることにより、構造的で確かなものとして音楽を確立したかったからではないかと考えている。晩年柴田南雄が合唱作品に心血を注いだ理由がそこにある。

常々いっているが、音楽は知性と感性のバランスによって立っていると思っている。言葉を伴う合唱は、より知性が強いようにも思っている。高学歴の人が多く合唱に没頭したり、楽しんだりしている理由はそんなところにあるのではないかと思っている。

知の巨人、柴田南雄！ 決して知の阪神ではない。（ちなみに武満徹は大の阪神ファンだった！）

2019. 5. 29

【「青猪の歌」について】

「青猪の歌」がもう一つぴんときないという人も何人かおられました。改めて「青猪の歌」についてまとめておきたいと思います。混声合唱曲「青猪の歌」は真壁仁作詩田中利光作曲の1971年の作品。無伴奏の作品で、「青猪の歌」「青猪幻影」「みちのく」の3曲で構成されます。真壁仁は山形の人で、農業や農民の真実を追求する詩集、論評などをしたとされます。「峠」という詩は教科書にも取り上げ続けられています。

実は、Rinteは団が立ち上がって2、3年目の頃、第2曲の「青猪幻影」を歌っています。「みちのく」よりは少し展望や春への期待の感じられる長調の傾向の強い曲です。でも、それは真壁仁の青猪（カモシカ）に見た自分自身に対する期待であり、幻影なんですよね。「みちのく」は陸奥、一般的には東北地方をさします。「みじろがず」は少しも動かさないこと。「もだしつつ」は黙しつつと書き、じっと黙っていること。「たぎり」はわきあがっていること。「めしひ」は盲と書きます。

なぜ青猪は東へ走ったんでしょうね？第2曲の「青猪幻影」にも東雲の深山という表現が出てきます。これはボクの読み方ですが、真壁仁は山形市の人です。西に日本海、東に出羽山地があります。もしかには深い山の岩場なんかによく出てきます。だから、東なのではないのかと思ってます。「かずかぎりないはなびら」は降り続く雪ですよね。

前回の練習で、「辺境に生きるものの悲しみ」がこの曲に貫かれているということを言いました。しかし、その悲しみは誇りでもあるのです。ボクなりの言葉で言えば、「田舎もんには田舎もののプライドがある、誇りがある」ってことです。

本当は「青猪の歌」全曲をやってみたかったのですが、第1曲がちょっとよくないんですよ。それで、今回は「みちのく」のみとしました。「青猪幻影」「みちのく」は本当にスケールの大きい、そして、内面的な深みのあるカッコいい曲だと思います。この曲のすごさをみなさんと描き出したいと熱い想いでいます。

2019. 5. 12

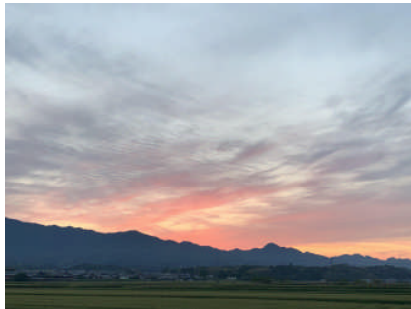
【ぼくのプログラムビルディング】

プログラムビルディングとは、コンサートの曲目や曲順を考えること。どんな曲を選んでどんな順番で演奏するかということは、演奏の質そのものと同じくらい、その演奏家の力量やセンスが問われます。「プログラム・ビルディングが成功すれば演奏会の半分は成功」と言われるくらいです。有名な指揮者や交響楽団なんかにはプログラム・ビルディング専門の人がついていて、一緒に考えるようですが、ボクの場合は合唱団のニーズをにらみながら、ボクが決めることが多い。長いときならば、2年以上先のコンサートの仕上がりを完全に頭に描いて、プログラムビルディングは完成するのです。プログラムビルディングが完成したら、実際にその完成形めざして練習を積み重ねていくのです。

1つユニークな例を挙げてみます。

連休に行われたEnsemble KiikaとEnsemble Clair, KyotoのジョイントコンサートのオープニングにM. シェーフアーのGAMERAN。ガムラン音楽をヒントに合唱で演奏できるようにしたもの。このコンサートの前半はコルシカ島の音楽やフィンランドの民族的なものに連なっていくので、その流れで民族色の強い物ではじめてののだが、もう一つこのGAMERANを持ってきた理由がある。1985年に京都信用金庫60周年を記念して京都三部作が三人の作曲家に委嘱された。そのうちの一人が武満徹で苔寺の夢窓国師からインスピレーションを得て「夢窓」を書いたのですが、もう一人がM. シェーフアーだったのです。この時シェーフアーは「香をきく」という曲を書いています。京都に縁のある作曲家を持ってくることでコンサートに奥行きを持たせると共に、京都に対する敬意と感謝を密かに表しました。このことをコンサートが終わってから演奏したメンバーに話したら、そんな意味を待たせていたのかと驚かれたのと同時に、コンサートまでに教えてほしかったと言われてしまった。かなり前に考えてしまっているのに、どんなことまでメンバーと共有したのかが分からなくなることもよくあって、何度も同じことを喋ったり、知らなかった！ってことも出てきてしまいます。

2019. 5. 10



演奏会の後、少し時間が経つと、どうしようもなく悲しくて、どうしようもなくさみしくて、誰かにこの心の内を打ち明けたくなる。心の中に何があるのかも分からないのに・・・。

2018. 6. 30

【ボクのロマン派宣言！】

ぼくは自称ロマン派音楽が得意じゃない宣言をずっとしてきた。これは、ぼくの合唱の師匠が常々つぶやいていた、ロマン派の作曲家の合唱作品にはこれ！という作品が少ない。という言葉によるのかもしれない。たしかに先生はハンガリーものやプーランクなどのフランスもの、シェーフアーや三善や林の作品を好んで取り上げ

ていた そして、究極のin tempo演奏だった

そんなことも色濃く影響してきたんだろう

少し年齢も重ね、人の喜びや悲しみ、どうにもならないことなんかも経験したり、接したりする中で理解することができるようになってきたのかもしれない しかし、音楽の中におけるロマン派的なものとはなんなのかが理解しきれないでいた 1年ほど前、N響を指揮したルイーゼのブラームスの4番シンフォニーを聴いた いやや分析した 棒振りは孤独だとよく言われる いろんな意味で使われる言葉だけれど、音楽を作っている現場ではコミュニケーションやダイアログがあればほど大切なのに、音楽活動の7割近くは一人で楽譜を読んでいる 調べ物をしている そして、曲のことを考えている そして、今更レッスンしてもらわなければならないから、密かに他の指揮者がどんなことをやってるのか、どんな棒を振ってるのかを研究する

ルイーゼのブラームスの4番だ 後期ロマン派音楽の完成した形とも言われるこの曲 その4楽章はロマン派という果実、いや、クラシック音楽という果実が熟れきったとも言われる ボクはブラームスの1番や2番は好きだ 古典的なたたずまいの中にロマンが溢れる しかし、3番や4番はより人の内面の奥にある心のひだにふれる

無理だ！人の悩み事やうるうるしたことや人を愛することの喜びや悲しみ、情熱、生きることの悲しみ そんなことにまで深入りできない…

4楽章の後半にフルートが喘ぐようにソロで生きることの悲哀を吐露する それを聴いて、今、そこに向かわずしてこれまで音楽をやってきた意味があるのか？と思えた

ブルックナーを取り上げた 木下牧子を取り上げた 木下が描くロセッティの闇の中から光を求めるような、やなせたかしの人生の歩みの中で打ちひしがれたり、ちょっとした喜びを感じたことの中に愛や、それこそ光を見出すことができた そして、神に対する愛、そんな中にロマン派的なものを見出してきた
そして、いま、再びうたう

わたしの思い出の中をいつもゆらゆら泳いでいるさかな

今年も夏がきたら、また一人で会いに行こう

ルルル… ひぐらしの鳴くもりかげをとおって

あのかわへあのにじいろの

ゆめのさかなを

言葉にしてロマン的なものを言うとするなら、これである

2018. 5. 5

【日本一の石垣】

母校から見上げる伊賀上野城の石垣 日本一だと教えられたが、この年になってもやはり「高いな、美しいな」と見上げる

この時期高校生の皆さんと音楽を共にすることが恒例となっている 今年も声をかけていただき、多くの時間、音楽を共に見つめることができた

毎年のことだが、若い世代のみなさんと時間を共にするときに、自分は何で役に立てるのか、何を伝えるべきなのかと思う そのためにもっと自分は力を持ちたい、多くの技術や引き出し、そして、人に届く音楽を持ちたいと思う そんな気持ちでこの時期を過ごす

演奏会は2週間後で、少し時間は空いてしまうが、きっと一人ひとりの中で音楽が熟成されると思っている

2018. 5. 3

【またね！】

ボクもいっちょ前に生意気な時期もあって、「どうして練習を休むかなー」とか思っていた もちろん、練習で積み重ねたことを元にして、本番のステージで一期一会の音楽があるわけだから、練習はとても大切である といつか、練習こそ大切だ

練習のための練習とかをしたいとか思っているのではなくて、練習の中で見つけてきた曲の素晴らしさや素敵さをメンバー全員で確認し合い、それを私たちの音楽、歌を聴いてくれるお客様に届けるのだと思っている

年を経てきて、もちろん良い練習の積み重ねが大切であり、そのためにはとにかく練習に参加することが大切なのだが、一方で、練習の終わりに、「この次また会おうね」という気持ちが強くなっている これは、遠方に出かけていることもあるのだと思うが、決してそれだけではあるまい アンサンブルは「信頼」 コミュニケーションが元々であると分かってきたからかも知れない

2018. 4. 16

【知性と感性のバランス】

千原英喜の「みやこわすれ」をやっている その「みやこわすれ」のなかに「はっか草」と言う曲があり、亡くなったお母さんか「はっか草のような人になりなさい」って言うんです もちろんこの曲、演歌みたいでとてもいい曲なんですけど、お母さんのことばかりは悔しいなと思い、アンコールに高田三郎の歌曲「くちなし」を混声編曲したものを対比的に取り上げたんです すごく音が跳躍しながらレチタティーヴォで歌わなくてはならず、難易度が高いのですが、やはりとても素晴らしい曲で…。 でも、なかなかうまく歌えなくて、一生懸命、楽譜に書ききれてない細かなニュアンスを歌って示していたら、あまりの曲の素晴らしさに泣けてきて泣けてきて… 53歳にもなって人前で涙して、とほほ…

くちなし

荒れていた庭 片隅に
亡き父が植えたくちなし

年ごとに かおり高く
花はふえ
今年は十九の実がついた

くちなしの木に
くちなしの花が咲き
実がついた
ただ それだけのことなのに
ふるえる
ふるえるわたしのころ

「ごらん くちなしの実を ごらん
熟しても 口を開かぬ くちなしの実だ」
とある日の 父のことば
父の祈り

くちなしの実よ
くちなしの実のように
待ちこがれつつ
ひたすらに こがれ生きよ
と父はいう
今も どこかで父はいう

母ははっか草のような人にと人の優しさ、温かさを教え、父はくちなしの花のように熟しても口を開かぬように、ひたすらに生きよとどう生きるべきかを教える…

この歳になってやっと、こんなことがわかってきたように思います ひたすらに生きるとは… なかなか難しい すぐ口を開いてしまいます

あっ！一番言いたかったのは、感情をコントロールして歌うことはとても難しいと言うこと 心を込めて歌うためには、感じ入ったことを伝えるためには、客観的な分析とそれを表現するための技術がないとだめなんだと言うこと 感情で歌っていたのでは、あんまり自分の感じたことは伝わらないのだと言うことです

今頃こんなことを言っててすみません

ちなみに、ボクが歌って示しているうちに泣けてきてしまって、涙ながらに曲のことを話した後、このくちなしはそれまでにはないくらい劇的にうまくなりました
これはボクの涙や涙ながらの説明への「共感」ですね

特に言葉を伴う声の芸術は、「感性」と「知性」の微妙なバランスによって成立すると思っています

2018. 1. 8

昼前からかぜがどんどんつよくなって、その風もどんどん冷たくなって、またぐんと寒くなっている 外に出るとほおがちぎれるほどの風だ 中にいても風の音が聞こえてくる

宮沢賢治の有名な詩に「風がおもてでよんでいる」がある もう賢治が死の床にっていた時のものなのだが、賢治のもどかしさが痛いほど伝わってくると同時に、「ソプラノ」なんて言葉がちりばめられていて、ハイカラで悲痛さはなくてファンタジックなほどでもある

この曲を終曲とした「心象スケッチ」という無伴奏混声合唱組曲がある 高田三郎が作曲しているのだが、若い頃から親しんできた 高田三郎は山田耕筰の次の世代の作曲家で尾高賞なんかも受賞していて、多くの合唱曲やカトリック教会における典礼音楽を残している ぼくが学生の頃の1980年代などは合唱コンクールなどで高田作品を取り上げる団体も非常に多く、その精神を深く掘り下げていた その後時代は外国作品や三善作品に主流が変わっていくのだが… どうかすると、高田作品を取り上げること自体が何か時代遅れのようなそんな感じの時期もあって、やっとその見直しもそこそこで始まっているように思っている 祈りに満ちあふれた精神性の高い高田作品は、そのアプローチも含めて見直しがあるべきだと思っている

さて、「心象スケッチ」の終曲はもとは「稲作挿話」という曲だった 当時としては無伴奏で、ソルフェージュ的な難しさもあってか、「風がおもてでよんでいる」に差し替えられた 「心象スケッチ」の楽譜にはこの「稲作挿話」がついているのだが、ほとんど演奏されていないと思う しかし、しかしだ 素晴らしい作品だと思っていて、チャンスがあればぜひやってみたいと思っている曲の1つだ 賢治が失敗しながらも必死に踏ん張り稲作を試行錯誤する若者を励まし、教え、諭すのだが、あの有名な「告別」に並ぶほどの高みのあるものだと思う

この夏に、「心象スケッチ」の第2曲を取り上げるが、ぜひこの「稲作挿話」も忘れられてはいけない作品だと思うのだ

2017. 11. 8

【合唱だけが・・・】

音楽の三要素は、リズム、メロディ、ハーモニー

音楽の三要素を持ちながら、「言葉」を持っているのは「合唱」だけだ 「歌曲」があるじゃないかという人がいるかもしれないが、一人の声だけではハーモニーを作ることができない 合唱だけが、人の声で言葉を表現し、人の声でハーモニーを作る 合唱だけなのだ

2017. 11. 6

【指揮者の仕事】

いまだによくたずねられる 「指揮者って腕を振る練習をずっとしてるんですか?」と 答えは少し正解でほとんど間違っている

確かに棒のテクニックを学ぶ時期というのはあり、その学生の頃はひたすらに腕

の振り方を練習していた 寝ても起きてても、「たたき」「しゃくい」などなどだった しかし、ピアニストがいつまでもハノンをやっていないのと同じように、「たたき」「しゃくい」の練習はしない それは習得しないと音楽を表現するところまでいかないのだ

頭や体で感じている音楽を表現するときに、「ここはマルカートだからたたいて、そのあとすぐたたきどめ、再び予備運動をしてはじめて、レガートだから…」なんてことを考えていたら、音楽までたどり着かないではないか 自然に体が、腕が動くようになっていないと話にならない

では、何をしているのかというと、ひたすら楽譜を読むのである 楽譜を読んで、どんな曲なのかをつかみ、作曲家の意図を理解して曲の細部や深部に迫っていくのである

2017. 11. 5

【中世的な音楽世界】

今日の合唱団Rinteの練習でも少し話したが、現代の作曲家ジェームズマクミランのミゼレーレについて

マクミランは1959年スコットランド生まれ 作曲家であるが、指揮者でもある 自身の作品のみではなく、現代の作品も多く取り上げている

現代の音楽もかつてのような難解さは少し鳴りを潜めて、民族的な五音音階や旋法などを使ったものが多くなっていると思われる マクミランの作風もそうであり、中世的な教会旋法などもよくつかわれる 管弦楽曲であってもグレゴリオ聖歌なども引用したりしている

さて、このミゼレーレ、おそらく有名なアレグリの作曲のミゼレーレをもちろん意識して書かれているだろう アレグリのミゼレーレは後期ルネサンス宗教作品としてはもっとも有名なものの一つだが、旧約聖書詩篇51番に作曲されている

マクミランもグレゴリオ聖歌を随所にちりばめながら、旋法を駆使して中世的な色合いを濃くしながら、現代的な作品に仕上げている

彼の作品に共通しているが、「闇から光へ」というテーマをもってこの曲も進んでいく



2017. 10. 27

【知の巨人】

図らずも、今年年末と来年夏の演奏会で柴田南雄さんの作品を取り上げる

柴田さんは昨年、没後20年、生誕100年だった 20歳代から柴田作品には興味をもってきた それは柴田作品を紹介し続けてきた指揮者田中信昭さんの影響なのだが、とにかく、追分節考、歌垣、みなまた、三重五章などの晩年氏が心血を注いだシアターピース作品は聞いたり、演奏したりしてきたし、比較的平易な初期の合唱作品である「三つの無伴奏混声合唱曲」は何度か振ってきた

今回取り上げるのは「冬の歌」からと「三重五章」から どちらの曲も調性音楽であり、比較的わかりやすい しかしながら、演奏している者にとっては、協和音で和声成り立っているわけでもなく、また、展開も独特の展開、転調をしていく慣れるまではつかみどころのない作品といえるかもしれない

膨大な資料と知識に裏付けされた哲学とまで言える彼の音楽は、きっと今まで以上に注目される日が来るに違いない

とにかく、取り上げることができて本当によかった



2017. 10. 18

【アンサンブルの大切な型を確認する】

- ・息を流して響きを大きくする
- ・耳を開く
- ・音符を言葉で捉える

これらの三つのことをこれまでもことさら大切にしてきました 具体的にはどういうことなのかを示し、みなさんの理解を深め、アンサンブルの熟成度を高めてきました

特に、【音符を言葉で捉える】については、

- 最小単位のフレーズはひとつの言葉なんだということ
- 言葉の中に抑揚やアクセント、アルシステイシスがあるのだということ
- 言葉にふさわしい意味を持たせるにはゆるみも必要だということ

2017. 1. 17

ボクのハンガリー音楽との出会いは大学を卒業して入った合唱団うたおにであった うたおにはこの頃念願の中部大会を突破して全日本合唱コンクール全国大会に何度か出場し連続して銀賞を取り始めた頃だった コダーイという作曲家の名前をきいて、「古代」？としか思い浮かばなかった 全国的に見ても、福島コダーイ合唱団などの特定の合唱団を除いて、コダーイの音楽やハンガリーの音楽を取り上げている合唱団は珍しかった ましてやコンクールにコダーイを持っていくなんて皆無であった 言葉の難しさはもちろんだし、コンクールで勝つには譜面ヅラがそう

難しくないのである ノルーウェーの娘、切なる願い、イエスと商人、リストに捧ぐ などの名曲をコンクールで披露してきた

コダーイはその生涯をハンガリーと音楽に捧げ、ハンガリーの国民が音楽に親しみ、音楽を理解することができるよう優れた教育システムであるコダーイシステムを確立した まさにハンガリーの英雄である コダーイはマジャール民謡に基づいたたくさんの合唱曲を書いたが、決して合唱の作曲家ではない ガランタ舞曲、孔雀のテーマによる変奏曲、ハーリ・ヤーノシュなどは現在も世界中のオーケストラの重要なレパートリーなのだ また、無伴奏チェロソナタなどもとびきり素晴らしい！20世紀を代表する作曲家の1人であるコダーイが合唱曲にも心血を注ぎ、多くの作品を残してくれたことはほんとうに素晴らしいことだ このレベルの作曲家がこれだけ合唱曲を書いていることはほんとうに稀なことなのだ

2016. 12. 30

4年程前までの5,6年間、ほぼ毎日ブログにエッセイらしきものを書いていた 再び音楽に対する考え、曲のことなどをしたためてみたいと思った。

【マジャールって？】

マジャールとはハンガリーのこと。ハンガリーの人たちは自分たちのことをマジャール人といい、自分たちの国のことをマジャールという。私たちがJapanではなく、日本と言うのと同じである。

語学的に言うと、マジャール語はヨーロッパ語族ではなく、ユーラシア大陸を東と西に分けるウラル山脈の麓に源を発するウラル語族に属する言葉。ヨーロッパではウラル語族はフィン語とエストニア語などのみ。確かに、ハンガリー人は目も黒く、髪の毛も黒い人が多いといわれる。世界史の時間に習った覚えがあると思うが、ゲルマン民族の大移動になったきっかけを作った東から鉄器を持って侵入してきたフン族、フン族の末裔がHungary、Finlandというわけである。ハンガリーオーストリア帝国などの輝かしい歴史があるものの、マジャールの人たちはいつも異民族扱いされ、ともすれば「自分たちはどこかあかんよなあ」みたいな感覚を持っている。私たちがマジャールの音楽に触れる時、どこか東洋的なものを感じたり、どこか親近感を感じたりするのはこの民族の起源が私たちの起源とそう遠くないところに源を発しているからかもしれないと秘かに思っている。ちなみにマジャールの音楽的な英雄はリストであり、コダーイであり、バルトークである。20世紀のハンガリーの英雄であるコダーイとバルトークは一つ違いで、ともにリスト音楽院で学んだ。在学中に二人は本当のマジャールの音楽を求めてハンガリーの村々をまわり、そこに伝わる民謡や踊りの音楽を採譜した。第二次世界大戦の中でコダーイはハンガリーに残り、マジャールの音楽を直接的に彼の作品に反映し、バルトークはナチスドイツを嫌いアメリカに亡命して、マジャールの音楽を分析して高い次元で彼の作品に反映していったのだ。彼らはともすれば比較され、数々の批判や中傷にもあったが、最後までお互いを信頼し、悪口を許さなかったという。

2016. 12. 9

今回の華なりコンサートは、イギリスの合唱音楽 中世の最古のカノンといわれるものから、現代に生きる作曲家の作品まで、教会音楽と世俗音楽に日本でも親しまれているイギリス民謡をとりまぜてお送りする

実は、イギリスは世界で最も合唱が盛んな国の1つである 他に、ハンガリーやエストニア、スウェーデンなどもあげられるが、イギリスの合唱音楽は600年の歴史を誇る合唱王国と言っていいだろう

なぜ、イギリスは600年もの間、合唱が盛んであり続けたのか？今から600年ほど前に ヨーロッパ各地でルネサンスが起こり、ポリフォニー合唱音楽が隆盛を誇ります しかし、例えばイタリアではモンテヴェルディがバロック時代の扉を開け、オペラの国になっていきます では、ドイツはどうでしょう 声楽の伴奏として発達した器楽の演奏がやがて独立し、バッハによって器楽のみの音楽世界が確立され、やがて交響曲などに発展していきます

イギリスはなぜ合唱の国であり続けたのか？それは、キリスト教と深い関わりがあるといわれます イギリスにおいても天才ウィリアム・バードによって、声楽曲の伴奏としての器楽演奏の道がつけられますが、やがて起こったピューリタン（清教徒）の人たちによって、教会におけるオルガンなどの器楽演奏は否定されます やがて、ピューリタンはイギリスでの支持を失い、新天地を求めてメイフラワー号に乗ってアメリカに向かいます 1607年のことです イギリスではイギリス国教会がその後、教会を支配しますが、否定されたオルガンなどは復活することなくあくまでも教会の中では合唱が教会音楽そのものであり続けたのです

また、その教会音楽を支える英才教育がオックスフォードであったり、キングスカレッジであったりで盛んに行われ、これまで優れた音楽家も輩出してきたのです このようなシステムや歴史の上に合唱王国イギリスがあるわけです

2015. 5. 2

昨夜、あるお店に立ち寄った時のこと 高校時代の同級生がつかつかとボクの方へ向かって歩いてきた 高校時代も、そしてそれから特に仲が良かったわけではなく、しゃべったことが何度あっただろうかと数えないとわからないほど 文句の一つも言われるのかとも思ったがにこやかである 人違いではないのかと思ったほどだった

話というのは、今は静岡の大学で学んでいるという娘さんの話 なんと高校時代、2回の演奏会に向けてボクの指導をうけたというのだ 普段はあまり学校のこと、部活のこともそう話さないその娘さんが、ボクとの練習の後は、楽しかった、よかったと話をするので、もしかしたら、高校時代の同級生やでそれ…と話したら、とても感激していたという話だった きょう娘さんに会いに静岡に行くので、会って話したことを娘に話したら喜ぶだろうとうれしそうに話していた

取るに足らないような話かもしれない しかし、音楽によって人というのはこんな風につながっていくのだと思うと、これまでやってきたことが認められたようで、なんとも嬉しかった